

功利主義と「生き方を巡る実践」

B・ウィリアムズによる功利主義批判の根底にあるもの

慶應義塾大学文学研究科 高原亮

はじめに

20世紀後半の英米倫理学において、功利主義は主に4つの立場から批判された。ロールズ等による正義論、ノージック等による権利論、フットやハーストハウス等の徳倫理、そして本稿で取り扱うB・ウィリアムズの行為者中心倫理学である(ノーマン(2001): 307-343)。

ウィリアムズは複数の点から功利主義を批判しており、「功利主義の名をものはや聞かなくなる日は遠くないだろう」(UFA:150)とまで述べている。彼の功利主義批判の中で最も有名なものは「インテグリティ批判(Integrity Objection)」と呼ばれている。本稿第1節ではこのインテグリティ批判を概観する。この批判において、ウィリアムズは、功利主義が行為者を単なる「充足の体系の代行人(agent of the satisfaction system)」(UFA:115)とみなし、それによって「インテグリティへの攻撃」(UFA:117)を為すことを問題視する。インテグリティ批判の影響力は大きく、功利主義者の反論やそれらに対する再反論の応酬によって多くの派生的な議論が行われてきた¹。

しかし、ウィリアムズの著作の難解さのためか、インテグリティ批判において「功利主義のどのような点が問題になっているのか」については複数の解釈があり、未だ統一的な見解は存在していない。そこで、本稿の第一の目標は、これら複数の解釈を整理することである。本稿第2節で行う整理に従うと、従来の研究において、インテグリティ批判に与えられてきた解釈は大きく3種類に分かれる。「人間や行為者性(agency)の理解の不十分さ」に問題があるとする行為者性説、「外的視点と内的視点の対立」に重点を置く視点説、「動機付けの不可能性」を根拠にする動機説である。

これらを整理したうえで、本稿は従来の解釈ではインテグリティ批判が提起している基礎的な論点が未だ網羅されていないと考える。そこで本稿の第二の目標は、ウィリアムズの功利主義批判を再考し、従来の解釈では十分に扱われてこなかった論点を浮き彫りにすることである。より具体的には、インテグリティ批判において、ウィリアムズは「義務を巡る実践」ではなく「生き方を巡る実践」について考察しており、「義務を巡る実践」を主として追求する功利主義の問題を、「生き方を巡る実践」の領域から指摘していると解釈する。

1. ウィリアムズのインテグリティ批判

ここでは、ウィリアムズのインテグリティ批判について「それがどのような形態の功利主義を批判しているのか」、「それがどのような批判であるのか」、「インテグリティとは何か」の3点を確認する。

1.1 インテグリティ批判の対象

第一に、インテグリティ批判がどのような形態の功利主義を攻撃していたのか明らかにする。

まず、それは個人道徳(personal morality)に関する功利主義であり、社会的・政治的決定(social and political decision)に関する功利主義ではない(UFA:77)。たしかにウィリアムズは後者の功利主義についても論じている(UFA:135-150)が、インテグリティ批判の主たる対象は前者の功利主義である。

さらに、ウィリアムズの批判の対象は「直接功利主義(direct utilitarianism)」である(Jenkins(2006):29)。これは、一般的に「行為功利主義」と呼ばれる功利主義と同じものを指している(UFA:81)。これに対置される「間接功利主義(indirect utilitarianism)」に関しては、インテグリティ批判とは別の箇所です否定的に論じられている(see, M:93-94、UFA:118-134)。

1.2 ウィリアムズの功利主義批判の内容

ウィリアムズは、インテグリティ批判において、2つの思考実験を提示する(化学者ジョージの事例・探検者ジムの事例)。どちらの場合にも、思考実験の主人公は「自身が忌避する行為 X(化学兵器の開発・1人の殺害)を選択しなければ、他者が代わりに別の行為(化学兵器の急速な開発・20人の殺害)を行い、その結果としてより多くの人々が不幸になる」という状況にいる(UFA:97-99)。(ジョージの事例では、彼とその家族が困窮しており、化学兵器の開発に従事しない場合、家族がさらに困窮するという状況も設定されている。)

この時、功利主義に従うと、主人公が X を選択することによって生じる不幸は、X を選択しないことによって生じる不幸よりも小さい可能性が高く、よって各行為者は X を選択するべきだと結論される。

ウィリアムズは、功利主義がこの結論を導出する過程を問題視する。つまり、彼の議論の目的は「X を選択する」という功利主義者の結論に対して問題を投げかけることではなく、その結論に至るまでの過程に関して批判をすることにある。(実際にウィリアムズは、特にジムの事例に関しては、結論と

して「Xを選択する」可能性を否定していない(UFA:99)。

筆者の見立てでは、ここには以下で見る3つの主張がある²。

第一に、功利主義が採用している帰結主義の問題として、「消極的責任(negative responsibility)」の問題が指摘される。帰結主義にとって、内在的価値を持つものは結果としての事態(state of affairs)のみである(UFA:83)。帰結主義的な考慮において重要なのは、「世界がどのような事態を含んでいるか」(UFA:95)であり、誰が行為者であるかは問題にならない。そのため、帰結主義においては、消極的責任と呼ばれる責任が生じ得る。ウィリアムズは、消極的責任を次のように定式化している。

私が「もしXしたらO1が帰結として生じること、もしXしなければO2が帰結として生じること、そしてO2がO1よりも悪いこと」を知っている時に、私が自発的にXすることを避けるとしたら、私はO2に対する責任を負う。(UFA:108)

このように、帰結主義においては「自分がXした場合」のみならず、「自分がXしない場合」にも責任が生じることになり、後者の責任が「消極的責任」と呼ばれる。しかし、消極的責任の概念は、「誰が行為するかによって(…)大きな違いが生まれるという我々の信念に反する」(Jenkins(2006):31)。

第二に、Xを選択した際に生じる行為者の心理的影響が問題になる。Xを選択した場合、行為者は兵器開発や殺人によってネガティブな感情(例えば罪悪感)を抱くだろう。しかし、功利主義の観点からは、このような感情は不合理なものであり、合理的な人物なら感じないはずのものとみなされてしまう(UFA:101)。

しかし、罪悪感のような感情は道徳的な感情と言える。ウィリアムズは「全ての道徳的感情を単に功利的価値の対象として捉えることはできない」(UFA:103)と主張し、功利主義が一部の道徳的感情を上手く扱えないことを問題視する。それにもかかわらず、功利主義に従って一部の道徳的感情を不合理とみなすならば、功利主義は「行為者を感情から疎外し、インテグリティを毀損する」(Jenkins(2006):35-40)ことになる。

最後に、行為者を単なる「充足の体系の代行人」とみなす功利主義が、「インテグリティへの攻撃」を行うことが問題視される。まず、消極的責任で見たように、功利主義(帰結主義)のもとでは「誰が行為するか」は問題にならな

い。そのため、我々は偶然その状況に居合わせ、より功利を増大させる因果を発生させる「因果のレバー(causal lever)」(UFA:110)を動かす存在になる。つまり、功利主義に従う場合、我々は「充足の体系の代行人」になる。ウィリアムズは、このことが「インテグリティへの攻撃」に繋がると主張する。

1.3 インテグリティとは何か

それでは、功利主義によって「攻撃」されるというインテグリティとは何か。まず、インテグリティは我々のプロジェクトや、プロジェクトへのコミットメントに関わる。ここでのプロジェクトは特殊な用法に基づいており、日常生活において生活必需品を買うといった小さなものから、「他人に優しくする」といった道徳的価値観を持つこと、「シオニズムに賛同する」といった政治的信念を持つこと、さらには人生をかけて創造的活動に従事することなどが含まれる(UFA:110-111, ノーマン(2001))。プロジェクトの中でも、各人が人生において重要だと考えており、そこから生きがいを感じているようなものは「基盤的プロジェクト」と呼ばれる(ML:12-14)。

インテグリティとは「ある人物が倫理的に必要または価値があるとみなすものに執着すること」(Williams(1995b):213)³であり、言い換えると、各人の人生に関わるプロジェクト(さらにはそこから生じる目標や欲求など)の繋がりを保持すること(成田(1994):44)である⁴。

このように、我々はインテグリティを保持することによって、人生において生きがいを得ることができる。一方で、功利主義はインテグリティを考慮せず、我々に「充足の体系の代行人」になることを要請し、「インテグリティへの攻撃」(UFA:117)を行う⁵。

以上がウィリアムズのインテグリティ批判における主張である。このうち、消極的責任については、上述したように、我々の信念に反するという点や、我々に対して過剰要求的(too demanding)である点が問題になっていると理解できる(see, Scarre(2016):22)。

しかし、「感情からの疎外」や「インテグリティへの攻撃」を巡る論点については、ウィリアムズが具体的に「功利主義のどのような点を問題にしているのか」が、彼の著作を読む限り判然としない。そのため、インテグリティ批判のこれらの論点については、より明瞭な説明を施すために、複数の解釈が施されてきた。次節では、インテグリティ批判の主要な解釈を3つの観点から分類する。

2. インテグリティ批判の解釈

まず、インテグリティ批判のポイントは、しばしば功利主義に向けられる「快樂計算の不可能性」ではない。つまり、インテグリティ批判は「功利主義はインテグリティを充足・欠損させた場合に生じる快苦の変化を計算に入れることはできない」という批判ではない。たしかに、ウィリアムズはこの論点について多少論じてはいる(UFA:101-102)が、それはインテグリティ批判の本題ではない。

では、インテグリティ批判のポイントとは何であるのか。この点に関して、従来の解釈者は大きく分けて3種類の解釈を提示してきた。それぞれ「人間や行為者性の理解」「視点」「動機付け」に論点があると解釈している⁶。

なお、これらの解釈は互いに排他的なものではなく、それぞれが重なり合いつつも異なる観点からインテグリティ批判の解釈をしているものと捉えるべきである。(同様に、後に本稿が提示する解釈も他の解釈と排他的なものではない。)

行為者性解釈

行為者性解釈は、ウィリアムズが問題にしているのは「人間や行為者性に関する理解」であると捉える。この解釈によると、インテグリティ批判は、功利主義の人間・行為者性理解が不十分である(成田(1994):47)ことや、そのために功利主義が「行為者性を弱める」(Jenkins(2006):34)ことを問題にする。

例えば、行為者性への理解の貧しさは、人間が持つプロジェクトや、そこから生じるインテグリティの価値を見逃すことに繋がる。このようなプロジェクトやインテグリティに対する理解の浅さによって、功利主義は人々のプロジェクトを毀損する理論となる(Ashford(2000)、Conly(1983))。

このように、行為者性解釈では、功利主義の人間理解や行為者性理解が貧弱であることがインテグリティ批判の論点だと解釈される。さらに、そこから派生する帰結として、行為者の持つ感情やプロジェクトが軽視されることも問題となる。

視点解釈

視点解釈では、まず行為者が立つ内的視点と、功利主義が立つ外的視点が区別される。ウィリアムズ自身も2つの視点の区別しており、前者は「内的視点」のほかに「個人的視点(personal view of point)」、後者は「外的視点」のほかに(シジウィックを引き合いに出しつつ)「宇宙的視点」とも呼ばれている(MSH:169)。ウィリアムズは、それぞれの視点から生まれる要請を同時

に実現することはできないと考えており(ML:51-52)、その意味でこれら2つの視点は両立不可能なものである。

視点解釈においては、功利主義が個人的視点やそれが持つ道徳的意義を排除してしまうこと(Brink(1986):418-419)や、外的視点に従うことでインテグリティの形成や保持が疎外されることが問題とされる(成田(1994))。インテグリティやその構成要素の価値は内的視点において初めて理解されるものであり、そのため内的視点には重要な道徳的意義があるように思われる。しかし、内的視点と両立できない外的視点に立つ功利主義に従う場合、行為者が内的に持つインテグリティの形成や保持を阻害することに繋がる(成田(1994):45-47)。このように、視点解釈は、インテグリティ批判の論点を内的視点と外的視点の対立に置き、功利主義が内的視点とその道徳的意義を排除し、さらにそのことによってインテグリティの発現を不可能にする点を問題にする。

動機解釈

動機解釈は、視点解釈で導入した2つの視点を区別しつつ、「外的視点の内には動機づけが存在しない」(佐藤(2015):94)ことを問題視する。この場合、行為者にとって外的な功利主義的視点は、私たちに動機づけを与えない。

道徳理論は実践的なものでなければならず、そのために人々を動機づけることができなければならないとすると、動機づけの力を持たない功利主義は道徳理論として不適格となる(成田(1994):47)。このように、動機解釈では、外的視点に立つ功利主義が動機づけを生まない点が問題視される。

なお、この解釈は、ウィリアムズの「行為の理由に関する内在主義」とも関連すると言われる⁷。ウィリアムズは、「Aには ϕ する理由がある」という理由言明が真であるためには、Aに ϕ することによって充足されるか、促進される動機がなければならないと述べ、内在主義を採る(ML:101-104)。もし功利主義が我々にとって外的なものであり、私たちの持つ動機群の中に存在しないのであれば、我々は功利主義に従って行為する理由を持たないことになる。

以上の3つの解釈はウィリアムズがインテグリティ批判で「何を問題にしているのか」を明確に説明しており、それぞれ「人間や行為者性の理解の不十分さ」、「内的視点と外的視点の対立」、「功利主義の動機づけの不可能性」にインテグリティ批判の論点があると解釈している。

筆者は、これら3つの解釈はインテグリティ批判の解釈として適当なもの

だと考えている⁸が、同時に、これら3つの解釈だけではインテグリティ批判の基礎にある論点が網羅されておらず、そのためにインテグリティ批判を十分に理解することが未だできないと考える。さらに、行為者性解釈と視点解釈は、功利主義からの再反論に対して脆弱であると考えられる。例えば、視点説に対しては、道徳理論においては外的視点こそが重視されるべきであり、内的視点は外的視点に従わなければならない(see, Brink(1986)、渡辺(2021b))という反論が可能である。行為者性解釈に対しては、道徳理論にとっては普遍性や公平性が重要なのであるから、そのような道徳理論が各人によって異なる感情やプロジェクトへと目を向ける必要はなく、従って行為者性を理解する必要もないという反論が可能である。

次節では、従来解釈とは異なる観点からインテグリティ批判の論点を抽出するとともに、このような功利主義者の再反論に対してインテグリティ批判がどのように応答可能であるのかを示す。

3. インテグリティ批判と倫理的考慮

本稿は、インテグリティ批判において、ウィリアムズは道徳哲学が探求すべき対象を「義務を巡る実践」から「生き方を巡る実践」へとシフトさせており、後者の領域から功利主義を再考し、批判していると解釈する。

本稿が着目するのは、UFAの序章においてウィリアムズ自身が立てている目標である。ウィリアムズは「それら(功利主義)の考えと共に生きる(living with)こと」(UFA:78、括弧内は筆者が補足)がどのような帰結を導くのかを示すことが、本論で提示される思考実験や議論の目標だと述べる(UFA:78)。つまり、ウィリアムズの焦点は**道徳的義務を導出するための理論**としての功利主義ではなく、我々が人生において**共に生きるもの**としての功利主義にある。

一見すると、ここにはさしたる含意がないようにも思えるかもしれないが、ウィリアムズがインテグリティ批判以降に展開した議論も考慮すると、実際には、ここには重要な含意があると考えられる。ウィリアムズは、後の著作において、道徳的義務を中心に議論を行う従来の道徳哲学に異を唱え、「生き方」を巡る問いを道徳哲学の出発点に置くべきだと主張している。

以下では、「道徳哲学の出発点」を巡るウィリアムズの主張をまとめた上で、インテグリティ批判に関する本稿の解釈を提示し、功利主義者からの再反論に応答する。

3.1 「狭義の道徳」と「広義の倫理」：道徳的義務と生き方

道徳哲学は「実践哲学」とも呼ばれるように、我々の実践について語る学

だが、ウィリアムズは「道德哲学の最良の出発点」(ELP:4)を考察する過程で、**道德哲学が考えるべき実践の範囲**について論じている。

まず、ウィリアムズの分析によれば、近現代の西洋における道德哲学は「狭義の道德」に関わる実践を対象としていた。「狭義の道德」とは、道德的義務の観念をその中心に置く領域であり(ELP:7)、そこでは義務と無関係な実践は排除される。従来の道德哲学は、このような「狭義の道德」を中心におき、その帰結として自律性を重視し、知識を基礎に置き、反省的であり、一般的・合理的な論証を重視する傾向にあった(see, Geuss(2012))。

この「狭義の道德」に対して、ウィリアムズは「広義の倫理」の領域を提唱する。これは「人はいかに生きるべきか」(ソクラテスの問い)という問いに関連するより広い領域である(ELP:1,7)。この区別から、ウィリアムズは「狭義の道德」が重視する義務の観念は「多様にある倫理的考慮の一つにすぎないもの」(ELP:202)であると述べる。つまり、ウィリアムズの整理によれば、我々の生き方に関わるより広い実践が「広義の倫理」に属し、その中の一部を占めるものとして「狭義の道德」がある。このようにして、ウィリアムズは「広義の倫理」のもとで「狭義の道德」の領域を相対化する。(以下、「道德」「倫理」という言葉は、それぞれウィリアムズの用語法に従って用いる。)

このように実践の問題を「義務を巡る実践」と「生き方を巡る実践」に区別したうえで、ウィリアムズは道德の体系を批判する。彼によると、道德とは「現代の西洋文化において特に重要な意味をもつ、倫理的なものの特殊な発展形態」(ELP:7)である。それは私たちが「特別な懐疑心をもって接すべきもの」(ELP:7)であり、また「多くの哲学的な誤りが含まれている」(ELP:218)と述べられている⁹。渡辺(2021a)の整理に従うと、具体的には「合理性・公平性・特別権威」を要求することが道德の特殊な特徴とされており、ウィリアムズによって批判されている。

3.2 インテグリティ批判と倫理的实践

ウィリアムズが道德と倫理の区別や、道德批判について語ったのは主として ML や ELP などにおいてであり、インテグリティ批判を扱った UFA よりも後のことである。しかし、既に見たように、インテグリティ批判の目的は、道德理論としての功利主義の批判ではなく、**功利主義と共に生きること**の問題を指摘することであった。このことから、インテグリティ批判は道德や義務に関する領域ではなく、倫理あるいは「生き方」を巡る領域において展開されている。ウィリアムズは、インテグリティ批判において道德的義務ではなく倫理的实践に焦点を当て、倫理の領域において発見される功利主義の問

題を批判したのである。

まとめると、ウィリアムズの功利主義批判は、行為者性の理解や、内的・外的視点の問題、さらにはそこから生じる動機づけの問題以前に、「道德哲学が考えるべき実践とは何か」という道德哲学の根幹に関わる問いを基礎に置いている。ウィリアムズによれば、従来の道德哲学が問題にしてきた道德的義務を巡る実践は、本来の倫理実践の一部にすぎないものであった。功利主義の考える実践もやはり「狭義の道德」に関わるものであり、批判の対象となる。

このような理解によって、インテグリティ批判の幾つかの論点がより明確に整理できるようになるだろう。例として、インテグリティを構成するプロジェクトの地位を挙げる。第1節で見たように、プロジェクトとは大小様々な目標や信念、価値観などを指す。プロジェクトは我々の生き方に密接に関わり、「広義の倫理」に関わる実践の基盤になるものとなる。一方、功利主義において、プロジェクトは「その遂行や達成が快樂や充足を生むもの」としてしか理解されない。プロジェクトのこのような理解にもとづき、功利主義は、行為者が功利の増大・減少に関わる状況に置かれたとき、行為者が持つプロジェクトからではなく、功利の増大のために行為することを要求する。このようにして、功利主義は我々のプロジェクトに基づいた倫理実践を不可能にする¹⁰。

最後に、従来の解釈(行為者性説・視点説)に向けられた再反論に応答する。行為者性解釈に向けられた反論とは、道德理論においては行為者性を理解する必要がないというものであり、視点解釈に向けられた反論とは、道德においてはむしろ内的視点が外的視点に従うべきだというものであった。これらの再反論に対して、本稿は次のように応答する。行為者性の排除や外的視点の優位性は、道德的義務が特殊な要求として持つ「公平性・合理性・特別権威性」があってはじめて認められるものであると考えられる。しかし、インテグリティ批判は「狭義の道德」ではなく「広義の倫理」の領域の中で論じられていたのである。これらの再反論は、インテグリティ批判を「狭義の道德」に該当するものとして受け止め、その領域が持つ特殊な前提からインテグリティ批判に応答している。そのため、インテグリティ批判の基礎にあるウィリアムズの考察を十分に理解するならば、これらの批判は失当であると考えられる¹¹。

おわりに

本稿では、ウィリアムズのインテグリティ批判を扱った。インテグリティ

ィ批判においては、功利主義が消極的責任を生じさせ、行為者を感情から疎外し、行為者を単なる「充足のシステムの代行人」とみなすことでインテグリティを攻撃する点を問題視する。インテグリティ批判には様々な解釈が与えられており、本稿ではそれらを行為者性の理解・視点・動機づけの3点から整理した。

さらに、本稿はこれらの解釈では汲みとれていないと考えられるインテグリティ批判の論点を取り上げた。その解釈とは、インテグリティ批判の目的が「功利主義と共に生きること」の帰結を考察することにあつたという点を強調するものであつた。ウィリアムズは「狭義の道德」の領域ではなく、「広義の倫理」の領域からインテグリティ批判を論じており、そのため、我々の生き方の基軸にあるプロジェクトや、プロジェクトを保持することによって顕わになるインテグリティの価値が重視される。

このような批判に対して、功利主義はどのように応答することができるだろうか。ウィリアムズの批判に対して直接的に反論することもできるかもしれないが、別の方法として、功利主義を倫理的実践の領域から論じることは依然として可能だと主張することもできるかもしれない。例えば、J・S・ミルの功利主義論は、道德と倫理の双方にまたがるものとして功利主義を捉えていると考えられる（ミル(1960, 2010)）が、このことについては稿を改めて論じたい。

注

(1)インテグリティ批判への再反論を試みた論考については、Harris(1974)、Brink(1986)、成田(1994)などを、このような再反論への応答を試みた論考については、都築(2008)、渡辺(2021b)などを参照。

(2)ただし、3つの論点の内、いずれの論点を「インテグリティ批判」と呼ぶかについては論者によって差異がある。Harris(1974)は第一の論点をインテグリティ批判の要点とみなしているが、都築(2008)は Harris の理解には反対している。また、Jenkins(2006)は第二・第三の論点をインテグリティ批判の要点と見なしている。

(3)引用内の「倫理的」という言葉は特殊な用法に基づいていると考えられる。(本稿第3節を見よ。)

(4)また、ウィリアムズによるとインテグリティは徳ではない。まず、寛大さのような徳と異なり、インテグリティは動機づけに関与しない。また、勇氣のような徳と異なり、インテグリティは望ましい動機を得るために必要というわけでもない(ML: 49)。徳は行為を生み出したり、正しい方向へと向か

わせたりするものであるのに対して、インテグリティは自分のプロジェクトに従って行為することではじめて頭わになるものである。

(5)インテグリティを重視するために功利主義に従わない人がいた場合、その人は「自分の手が汚れることを嫌うあまりに、道徳的に要請されている行為を忌避する態度(道徳的に自己耽溺的な(moral self-indulgence)態度)」を持っていると考えられるかもしれない。しかし、ウィリアムズはこのような反論は失当であると主張している。(詳しくは、UFA:102-103, ML:40-53 を参照。)

(6) なお、本稿の整理によっては網羅できなかった解釈も存在する。例えば、Conly(1983)は「個人の基盤的プロジェクトが他の行為者の影響をうける」ことをインテグリティ批判の論点の一つとして挙げている。ただし、このような論点は、3つの解釈から生じる派生的な問題であると考えられる。

(7) 両者の関連性は Chappell(2007)や、伊勢田(『道徳的な運』(MLの邦訳)「解説・各章解題」)にて指摘されている。

(8)ただし、動機説の妥当性については疑問が残る。ウィリアムズは、ジムが最終的に「20人を助けるために1人を殺害する」という功利主義的な結論を採用する可能性を認めており(UFA:99)、この場合、ジムは功利主義によって動機づけられていると言える可能性がある。

(9)「狭義の道徳」に対するウィリアムズの批判については Jenkins(2006):53-86、Thomas(2007):105-133、渡辺(2021a)に詳しい。

(10) この点に関しては、Stocker(1981)が指摘している起源的な行為の記述(「～から行為する(acting out of)」)と、目的論的な行為の記述(「～のために行為する(acting for the sake of)」)の対比も示唆的である。Stockerは、これら2つの行為記述を分類した上で、目的論的記述の持つ説明能力は限定的であり、全ての行為を目的論的に記述することはできないと述べる。具体的には、友情的行為は目的論的記述によって説明できず、そのような行為を記述するためには起源的記述が必要になると述べている。さて、行為者が自身にとって内的なプロジェクトから行為する場合、行為者は「プロジェクトから行為する」ことがありうるだろう。これに対して、行為者にとって外的な功利主義に従う場合、行為者は常に「功利を増大させるために行為する」こととなる。

(11)ここから、本稿の解釈が従来解釈とどのような関係を持つのかに関して、特に行為者性解釈と視点解釈との関係については、それらの解釈の根底にあるものを明らかにし、さらに両解釈の妥当性を支えるものとして整理できると考えられる。

一次文献・略記号

- M Williams, B. (1993) *Morality: an introduction to ethics*. Canto edition., Cambridge, Cambridge University Press.
- UFA Smart, J. J. C., Williams, B. (1973) *Utilitarianism for and against*, Cambridge University Press.
- ML Williams, B. (1981) *Moral luck: philosophical papers, 1973-1980*, Cambridge University Press. (B・ウィリアムズ, (伊勢田哲治監訳)(2019), 『道徳的な運: 哲学論集 1973-1980』, 勁草書房.)
- ELP Williams, Bernard. (【2011】) *Ethics and limits of the philosophy*, Routledge Classics. (B・ウィリアムズ(森際康友・下川潔訳) (2020), 『生き方について哲学は何が言えるか』, 筑摩書房.)
- MSH Williams, B. (1995a) *Making sense of humanity: and other philosophical papers, 1982-1993*. Cambridge, Cambridge University Press.

Williams, B (1995b) “Replies”. In Altham & Harrison(1995)

二次文献

- Altham, J. E. J., Harrison, Ross. (1995) *World, mind, and ethics: essays on the ethical philosophy of Bernard Williams*. Cambridge; New York, Cambridge University Press.
- Ashford, E. (2000) “Utilitarianism, Integrity, and Partiality”. *The Journal of philosophy*. vol. 97, no.8, p.421–439.
- Brink, D. O. (1986) “Utilitarian Morality and the Personal Point of View”. *The Journal of philosophy*. vol.83, no.8, p.417–438.
- Chappell, T. (2007) “Integrity and Demandingness”. *Ethical Theory and Moral Practice*. vol.10, no.3, p.255–265.
- Conly, S. (1983) “Utilitarianism and Integrity”. *The Monist*. vol.66, no.2, p.298–311.
- Guess, R. (2012) “Did Williams Do Ethics?” *Arion: A Journal of Humanities and the Classics*. vol.19, no.3, p.141–162.
- Harris, J. (1974) “Williams on Negative Responsibility and Integrity”. *The Philosophical quarterly*. vol.24, no.96, p.265–273.
- Jenkins, Mark P. (2006) *Bernard Williams*. London ;, Routledge.
- Scarre, G. (2016) *Utilitarianism*. Abingdon, Oxon ;, Routledge, Taylor &

Francis Group.

Stocker, M.(1981) “Values and Purposes: The Limits of Teleology and the Ends of Friendship”. *The Journal of philosophy*. vol.78, no.12, p.747–765.

Thomas, A. (2007) *Bernard Williams*. New York, Cambridge University Press.

J・S・ミル (朱牟田夏雄訳) (1960) 『ミル自伝』, 岩波書店.

J・S・ミル (川名雄一郎, 山本圭一郎訳) (2010) 『功利主義論集』, 京都大学学術出版会.

R・ノーマン (塚崎智監訳) (2001) 『道徳の哲学者たち 一倫理学入門一』 (第二版), ナカニシヤ出版.

佐藤岳詩 (2015) 「倫理学における内的視点と外的視点：「全一性に基づく反論」と間接功利主義」, 『西日本哲学年報』 (23), p.91–108.

都築貴博 (2008) 「ウィリアムズにおける全一性と道徳的行為者性」, 『哲学』 (44), p.101-118.

成田和信 (1994) 「功利主義倫理学とパーソナル・インテグリティ」, 『哲学』 (97), 三田哲学会, pp.41-63.

渡辺一樹 (2021a) 「疎外された倫理：バーナード・ウィリアムズの道徳批判」, 『哲学の門：大学院生研究論集』 (3), 日本哲学会.

渡辺一樹 (2021b) 「バーナード・ウィリアムズの功利主義批判再考」, 『新進研究者 Research Notes』 (4), 日本科学哲学会.